

大阪商業大学学術情報リポジトリ

近代大阪における四条派の評価について—西山芳園
・完瑛を中心に—

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学商経学会 公開日: 2019-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 明尾, 圭造, AKEO, Keizo メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/826

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



近代大阪における四条派の評価について

—西山芳園・完瑛を中心に—

明尾 圭造

はじめに

- 一、大阪四条派の先達 西山芳園と完瑛
- 二、美術名鑑にみる西山芳園・完瑛とその周辺
- 三、ビゲローコレクションに見る西山芳園の存在意義
- 四、大阪における四条派の愛好者（完瑛鑑定留「鑑定録」と『西山芳園並完瑛展』をもとに）
- 五、大阪画壇（芳園・完瑛を中心に）の評価とその展望

資料

はじめに

平成二九年の秋、大阪商業大学商業史博物館で特別展『なにわ風情を満喫しませう—大阪四条派の系譜』^①を担当した。同展で取り上げた西山芳園、完瑛親子は近代大阪を代表する四条派の画家であるにも関わらず、昭和一七年に大阪市立美術館で開催された『西山芳園並完瑛展』以来、まったく大阪では顧みられなかったと言っている。従って、小規模ながら本展（図版一）は、実に七五年振りの回顧展でもあった。

円山応挙、松村月溪（円山四条派）を擁する京都では、彼ら流派の始祖だけでなく、弟子の末端に至るまで、開催された展覧会は枚挙に暇



図一 図録表紙

がない。日本人が、いかに有名好きとは言え、京都に比して大阪における画家の顕彰がこれほど等閑にされているのは異様と言えよう。

同展図録⁽³⁾でも述べたのだが、近年、大英博物館とロンドン大学を中心に大阪画壇の研究が進んでいる。もともと井原西鶴や近松門左衛門など江戸期の国文・演劇研究を進めていた研究者たちが上方役者絵に着目したのが発端である。

明治維新以降、前時代の無用の芸術として、国内では屑同然の扱いを受けていた写楽や北斎、歌麿といった浮世絵は、明治前期に来日したアーネスト・フェノロサやウィリアム・スタージェス・ビゲロー（後述）などによって再評価され、彼らの眼によって精選された優品が国外に流出していった。今日、こうして蓄積された作品群をもとに海外での日本画研究が展開されつつある。

これら浮世絵とともに海を渡った日本画のなかに大阪画壇の作品が少なからず有る。勿論、狩野派や住吉派をはじめ円山四条派等、今日、繰返し展覧会が実施される有名大家の作品も当然含まれてはいるが、永らく不明画人として収蔵庫に眠っていたのが、昨今、研究対象になっている大阪画壇作品群である。彼らの作品集積は、明治以降、今日まで継続して続けられており、その対象は決して有名無名（大阪画壇はその無名性ゆえに作品価格も下げ止まり状態）や流行り廃りに関係なく、純粹に作品の良し悪しによって虚心に続けられている。

では、大阪の円山四条派には如何なる画家がいたのか。まず、応挙の弟子として森徹山、上田耕夫が、月溪（呉春）の弟子として長山孔寅、佐藤魚大、松本観山が想起される。四条派は松村景文（月溪異母弟）の影響力が大きく、その代表格として上田公長と西山芳園の名を挙げねばならない。なかでも西山芳園、完璧親子による西山派は大阪町人（財界人）だけでなく、明治期に来日した御雇外国人にも人気が高く、彼らの手によって多くの作品がイギリスやアメリカに残されていることが重要だ。

展覧会を通して実見した西山親子の作品は、表具備えが良く、大切に扱われてきたことを示すものが多かった。所蔵者も大阪財界人を中心に海外へも広く伝播している。現状での評価とは全く異なるこれら作品に対する当時の認識について、明治大正期の大坂画壇と西山派の存在意義、そして近代大阪の美術愛好者が四条派を如何に評価していたのか、完璧に関する新たな資料も交えて考えてみたい。

一、大阪四条派の先達 西山芳園と完瑛

西山芳園・完瑛は、幕末明治の大阪において著名な四条派絵師であるにもかかわらず、応挙や呉春に比して、その生涯が判然としない。それは、昭和一七年に大阪市立美術館で実施された「西山芳園並完瑛展」の時点でさえ「父子の画蹟は珍藏されているが、不幸にしてその研究はまだ何人も着手せず、僅か百年内外の短い過去であつて、閱歴等は十分に明かされていないのは誠に残念である」と述べられていることに集約されよう。それから七十年以上が経過した今日、どこまで彼らの全貌に迫れるか甚だ心もとないが、若干の資料をもとに二人の生涯を概観してみよう。

西山芳園略伝

西山芳園に関しては武富瓦全（春二・明治四年～同四四年）の追懐を紹介したい。武富は銀行勤務の傍ら学問を太田北山に絵画を西山完瑛に学んだ。近松研究で知られた俳人で大阪俳会の重鎮として活躍した。著作としては『瓦全遺稿』（明治四四年）が纏まったものだが、恩師西山完瑛を通じた追想録として「雑録西山芳園先生」がある。

それによれば、西山芳園は文化元年（一八〇四）大坂に生まれた。名は成章と云い、字を子達、通称達吉と称し、芳園と号した。武富述懐（以下、「」内は同資料からの引用）によれば「生家は大坂本町辺りの立派な木綿問屋であつたそうで、兄弟二人あつて先生はその弟でして。その後如何いふ都合か家道日に挙らず、遂にその産を倒すに到りましたから、先生は仕様事なく三井の呉服店か、糸店の小僧になられました」とある。勤めていた店の番頭に画を描くことを進められ、「芳仲」という画家を紹介されたという。番頭が画家の師匠を紹介したのは、商家には向かぬ小僧さんだったからであるが、ここで重要なのは紹介されたのが中村芳中（生年不詳、文政二年（一八一九）没）であることだ。番頭が「あまり上等の先生でない」と言ったのは面白いが、大阪琳派の雄、中村芳中が最初の師匠であることは興味深い。二人の生没年から考えても、芳園が十五歳前後までしか師弟関係はなかったと思われるため、その期間もわずか数年のことであつたろう。「己より好い画家に就けて業を修めさせたならば、屹度大家になれる人物である、と気付いた先生（芳仲）も中々面白い考である。当時京都にて鏘々の名ある松村景文先生を紹介して、この先生の門人と為れと云つて、先生（芳仲）自ら先生を卒いて師弟の約を結ばせた」とある。門人の前途を考え、京都の景文に紹介した芳中は自らの死期を悟っていたのかもしれない。

だが「景文先生に就いて学ばれたのは、ほんの僅かの間である。手本を貰ひに毎月一度づ、三十石船に乗つて京都へ上る。これが修業時代に於ける楽しかつた事の一つだつた」と述べられるように景文門下となつたものの、通い弟子として多分に独学に近い修行時代であつたことが伺える。

結果として、芳園の画風には戯画風な人物花鳥や琳派様式を得意とした芳中の影響は見受けられないが、あくまでもオーソドックスな四条派様式で「幽雅軽淡」なる西山風を確立した芳園には、四条派の絵画こそが最も自己表現の意になつたものであつたと言えるのではないだろうか。さらに、その修行時代も含めて画家としての生活は如何なるものであつたのか、武富述懐により、さらに紹介してみよう。

芳園の画は「非常におとなしく行届いた画で、何れを觀ても清和温潤、一のごまかしもなければ敗筆もありません。尤も写生に力められたと見えまして、今日写生帖なども沢山に残つて居り」、それは現代まで残された画帖からも伺うことができる。また、「円山四条派などは規模が狭い、且遊歴を禁じてあつたから、山水画の如きも京都近傍の写生に出でず、といふのは輿論ですが、先生の如きは少しは歩かれたと見えて、東海道を経て江戸に到るまでの景色を、写生」したものがあつたという。これは私も以前に「薩埵峠」の真景図（個人）を實際に見たことがある。

日常的に「先生は半時と筆を放した事がない。非常に健筆家であつたと見えまして、（略）毎日常朝起きて来客がありますまでに、半切（唐紙などの全紙を縦に二つに切つたもの）に書いた書画）の二三枚は日課のやうにして描かれた」というのだが、その潤筆料は廉く「僅か一分」であつたらしい。

こうした事情もあり、芳園筆の半切は今日、京阪神に多く散見されることとなつた。ただ「猛烈なるもの、譬へば月に嘯く虎の如きもの…びんびんと無闇に筆を見せるやうな線をあまり描きませぬから、獸類の如きは寧ろこの画風では、描けない」と云つた方が妥当かも知れませぬ」とあるように今日的に展覧会映えるような作品には無縁の作家であつたということだろう。

岸派の「虎」や森派の「猿」などとは違い、「幽雅軽淡」な作品を追求した芳園のスタイルがある。同時期の画家、森一鳳と比較して「先生よりは余程盛んであつたさうです。所謂『儲かる一方』と云つて、藻刈舟を沢山描いた人で、藻を刈る一鳳即ち儲かる一方に音相通じまする處から、俗な画ですが大阪の人氣に合つた」との述懐がある。

商売繁盛と縁起の良い語呂合わせに目がなかつた大阪商人が最も好んだ題材と言えるのだが、不思議なことに森一鳳の「藻刈舟」は、今日あまり市場では見かけない。ただ、当代の人氣作家であつたことは事実であろう。一方で、奇を衒わず「幽雅軽淡」を基とする芳園には弟

子が少なかったようで「僅かに其翠といふが一人ありますのみで、これとても高手ではありましたが老熟する時代には、惜しいかな中風が發つて遂に全く画が描けなくなつた。この外に門人は無いでもありませんが、今日完全なる西山風を保つて居らるゝは、完瑛先生唯一人あるのみ」だったという。他に西山風を体現する弟子として久保田桃水「天保十二年（一八四一）〜明治四四年（一九一一）」の名を挙げねばなるまい。また、詳細は不明ながら逸見塘雨（生没年未詳）、五渡亭国升（生没年未詳）の名も確認できる。

芳園は晩年、浮世小路(丸)に住んでいた。浮世小路は船場の東西を横断する通りで、今橋通りと高麗橋通りの間にあり本来は背割下水（太閣下水）の位置にある狭い通りであった。もともと小商店が軒を連ねた裏通りであったが、いつしか芳園のような芸事の師匠宅や、船場の旦那の妾宅街でもあったと言われる。

いずれにせよ、大阪の船場を拠点に四条派の真髓を極め近世浪華画壇の名手と称せられた芳園は慶応三年（一八六七）に享年六四歳で没した。戒名は芳園仁觀義察信士。その墓は大阪市北区東寺町（現与力町）善導寺（浄土宗）にある。

西山完瑛略伝

西山完瑛は天保五年（一八三四）芳園の子として大坂に生まれる。名を謙、字を子受、通称を謙一郎と云い、完瑛と号した。幼少より父に画法を受け、四条派の深奥を究め、人物、山水、花鳥を得意とした。さらに後藤松陰「寛政九（一七九七）〜元治元年（一八六四）」の私塾「広業館」で儒学を学んでいる。松蔭は篠崎小竹の娘婿で、晩年は梶木町御霊筋西南角（北浜五丁目）で開講(丸)していたことから、後述するように完瑛宅からも目と鼻の先であった。

さて、壮年の頃、完瑛は播州明石藩に出仕していたことが本人の履歴（私立浪華書學校教員履歴書）によって確認(丸)できる。

大阪府下東區北濱三丁目廿五番地

西山謙一郎

号完瑛 字子受

一 父芳園二學ヒ畫ヲ以テ播磨明石ノ藩ニ入り俸祿ヲ受ケ廢藩ノ後致仕ス

これによると、完瑛は明石藩お抱え絵師であったことがわかるが、先の展覧会（平成二九年・商業史博物館）時には、その経緯や俸禄については不分明で、その居住地に関しても明石本藩に赴いての出仕ではなく、幕末期に中ノ島常安町にあった明石藩邸（蔵屋敷）に必要時に出したものと考えていた。しかし、明石に実際に居住していたことを窺わせる新出資料が確認できたので以下に紹介したい。

画會御届

府下東区北浜三丁目式拾番地寄留

兵庫下明石樽屋町百三拾式番地住士族

一 私儀従来画工業二候処、今般亡父追善之為本月

廿三日午前七時午後七時限幸町 丁目 番地

廣岡次郎三郎宅ニ於テ新画展観會相催

申度候二付、御断御届奉申上也

十一月 日

西山謙一郎 印

廣岡次郎三郎

戸長

大阪府知事

殿

先述の履歴書は、明治十七年（一八八四）に樋口銀行の創設者であった樋口三郎兵衛の援助によって設立された浪華畫學校（東区道修町五丁目二七番地）に提出されたものである。

設立当初の教員として、守住貫魚、狩野永祥、上田耕沖、森関山、水原梅屋、森琴石の名前が確認（前註一一）出来るが当初の名簿に完瑛の名前はない。病弱であった狩野永祥に替わって明治十八年に教授の任に着いたものであろうと推測されている。当時、完瑛は五〇代で最も脂の乗り切った頃と思われるが、同校にいつまで関与し、如何なる授業をしたのか、その詳細は判らない。

一方、新出の画會御届によれば、履歷書の住所(明治一七年)が北濱三丁目廿五番地となつてゐることに對して、北濱三丁目式拾番地に寄留となつてゐる。興味深いのは、兵庫下明石櫛屋町百三拾式番地住士族と明記されてゐることだ。明石藩士として城下に居住したことを示す重要な資料といえよう。住居の櫛屋町は明石城南西部に位置する町人地で西国街道に面する場所であつた。

本資料は亡父芳園の追善画會案文のためか、年号記載がない。しかし、居住地が明石であること、そして明石藩士族であることから秩祿処分(明治九年)以前、芳園没(慶応三年)後の、七回忌に当たる明治七年(一八七四)頃のものかと推察される。パトロンであり画會の会場を提供した廣岡次郎三郎は豪商加島屋の關係者であらう。加島屋は大名貸として有名で多くの貸付実績があり、明石藩とも關係が深かつた。完瑛の仕官はこの辺りに遠因があるかもしれない。

さらに画會御届には折込みのメモ書きもあり、會主が「完瑛西山謙再拜」、執事に「菅其翠、久保田桃水」など芳園の弟子が名を連ね、社中(完瑛弟子)が補助として参加してゐる。また、會幹として山中吉兵衛、西尾播吉、植村平兵衛、山西宗五郎、山中吉郎兵衛の名が見える。彼ら大阪を代表する道具商等が實質的に画會を取り仕切つていたのであらう。これらの資料から、完瑛は明石藩致仕後は北濱に居を構え、船場の商人を顧客に持ち、作品の仲介斡旋に骨董道具商(詳細後述)との關係があつたことが窺える。

明治十九年、西山完瑛による花鳥画の本画二五図を木版画に仕立てた作品がある。『完瑛画譜』(個人蔵)で、奥付によれば筆者西山謙一郎(完瑛)、出版前川善兵衛(文栄堂)、彫刻武藤稻藏、摺工能邨榮吉となつてゐる。津守国美(住吉神社七四代宮司・国学者)による序文に：

：西山完瑛ぬしの種々の花鳥のいととうるはしき画をおなし大坂に名に高き書林文榮堂前川氏か今度桜木にちりはめて一ツのたからにものしてわか国中はいふもさらなり異国人にも見せ御代と共に永く伝へん：

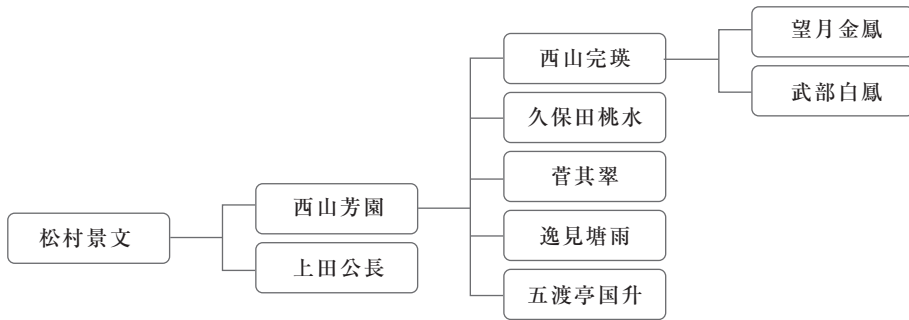
とあるように、完瑛自慢の花鳥画を版刻し、国中のみならず異国にも伝える手立てにしたとある。そして、藤沢南岳(泊園書院二代院主・漢学者)の跋文によれば、

花以香貴鳥以聲賞形似固不足諸妙乎披」此帖對之恍訝有香有聲嗚呼精神乃」

在形似之外画家精神亦在翰墨之外乎余」与完瑛西山君交久知其為人卓異最善」

飲二至斗餘其神始旺而後下毫神氣勃」々余此御帖亦成爛醉之餘郭熙所謂」

抑鬱沈滯何時攄發人思洵哉前川」氏梓而行之是伝写生之神乎哉」



図二 西山派系譜

とあり、描かれた花はまさに香り、鳥は鳴かんとするが如くである。そして、酔えばたちどころに神妙なる作品が仕上がる、というように友人として彼の日常を活写している。明治期、本画を版刻し画帖仕立にすることは大いに流行した。本書もその一例といえるが、版画になったから、津守国美が言うように多くの人の手に渡り、海外の人々の目に触れたのかもしれない。

画系（図版二）の弟子としては、望月金鳳〔弘化三年（一八四六）〜大正四年（一九一五）〕とともに武部白鳳〔明治四年（一八七二）〜昭和二年（一九二七）〕が確認できるが、芳園の同門として、完瑛がもつとも意識したのは久保田桃水であったろう。完瑛より七歳年下で一〇年以上も長く生きた桃水は大坂の風景画帖をはじめ多くの作品を今日に残している。面白いことに、その画風は師の芳園よりも完瑛に近い。後述するが、芳園の淡い筆線よりは完瑛の鋭角的なそれに近いからである。また、芳園画風を最も継承したといわれる菅其翠からの影響も大きかったのではなからうか。一方で、実業家の芝川又右衛門や水落露石も絵の手解きを受けるなど、その裾野は船場を中心に広がって行ったものと考えられる。そして、四条派の先立として近代大阪に足跡を残した完瑛は、明治三〇年（一八九七）に享年六四歳で亡くなっている。戒名は「玉簪秀峰完瑛禪定門」。その後、弟子の武部白鳳が完瑛没後二五周年（大正一〇年）に、大阪美術倶楽部で追悼展覧会⁽¹¹⁾を実施し、芳園が眠る大阪市北区東寺町（現与力町）善導寺に『完瑛西山先生墓』を建立している。

二、美術名鑑にみる西山芳園・完瑛とその周辺

画家に与えられる評価は時代の写し鏡と言えよう。従って、時代の変遷や流行り廃りによって作品の商品的価値も変動していく。明治大正昭和の移り変わりの中で、西山芳園・完瑛とその周辺の評価が如何に変わっていったのか。各時代に出版された美術名鑑をもとに考えてみたい。

論不位序家画譽名																				
波 邊 祥 益	小 田 應 陽	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛
狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛	狩 野 松 寛

図三 『日本美術書画名譽一覽全』 部分

明治の状況

『日本美術書画名譽一覽全』(図版三) は、明治二八年一月に心斎橋筋にあつた赤志忠雅堂で発行された名鑑である。同書は、折本一枚摺全一冊(縦七一・五×横四九・五)で定価廿五錢にて大阪で販売された。最下段に記される忠雅堂発兌(発売)書目によれば四千余部の蔵版を取り揃える和漢洋書籍の老舗で、『日本美術画家人名詳伝』、『日本固有美術鑒定便覧』、『古今名家新撰書画一覽』など美術関連図書の発行に力を入れていた。本書の例言(編述の目的)は「此書八随見随聞ニ依テ成ルモノナレバ優劣ハ固ヨリ序位高下ヲ論ゼズ觀者コレヲ想トセヨ」と半ば逃げ腰だが、紹介する画家はこの一枚で二三〇〇余名に及んでいる。明治二八年当時、名譽の画家として認識された内訳は以下の通りである。

縦三列に仕切られた構成で、目立つ中央部分には四七〇余名が紹介されている。「先哲画儒双見(狩野探幽・頼山陽含む三二名は最上位)」、「近世国画名譽」(円山応挙・葛飾北斎)、「南画芳名故人」(池野大雅・与謝蕪村)、「浮世画名声故人」(岩佐又兵衛)、「閨秀戲墨」(奥原晴湖・橋本青江)などで()内の画家は枠組みで字体も大きく注目すべき画家であることを示している。両サイドの人数はさらに多い。向かって右が「名譽画家序位不諭」で、八六〇余名が記されており、六人(大坂狩野渡辺祥益、西京鈴木松年、大坂円山西山完瑛、西京円山森寛斎、東京狩野狩野探美、西京塩川幸野梅嶺)が上部に紹介されている。一方、左には「秀逸画家優劣不判」として同じく八六〇余名のなかで、六人(大坂南宋田結莊千里、西京南宋田能村小虎、西京合法富岡鉄斎、西京南宋谷口露山、東京南宋滝和亭、西京南宋村田香谷)が紹介されている。

地元大阪における発行とは言え、二三〇〇余名の中から選ばれた五一名に西山

表一 (数値の単位は円)

画家名	大正五年	大正八年
西山芳園	一一〇	四〇〇
西山完瑛	七五	二〇〇
木村巽齋	九〇	二〇〇
十時梅屋	一八〇	一五〇
高久靄厓	二〇〇	四〇〇
岡田米山人	二〇〇	三〇〇
原在中	二〇〇	二五〇
森徹山	三〇〇	二〇〇
望月玉蟾	二五〇	二〇〇
長谷川等伯	三〇〇	四〇〇
池大雅	五九〇	一六〇〇
狩野探幽	七〇〇	一五〇〇
橋本雅邦	一一〇	一五〇〇
竹内栖鳳	一一〇	一五〇〇
岩佐又兵衛	四五〇	一五〇〇
渡辺華山	三五〇	一五〇〇
田能村竹田	四〇〇	一〇〇〇
与謝蕪村	三五〇	一〇〇〇
富岡鉄斎	一四〇	一〇〇〇
谷文晁	五〇〇	一八〇〇
岸駒	四〇〇	四九〇
本阿弥光悦	一七〇	二〇〇
伊藤若冲	四〇〇	四〇〇
円山応挙	七〇〇	二〇〇〇
松村呉春	五〇〇	五五〇
曾我蕭白	二五〇	四〇〇
岡田半江	二五〇	四九〇
河鍋暁斎	一三〇	二五〇
横山大観	七〇	三〇〇
土田麦僊	四〇	三〇〇

完瑛が入っていることは見逃せない。完瑛は明治三〇年に亡くなっているもので、本書出版時は六二歳である。大阪の円山派を代表する画家として認識されていたことの証である。一方、完瑛の他に在世の画家として大坂狩野渡辺祥益、大坂南宋田結莊千里が別格表記されていることも興味深い。渡辺祥益は、洋画家小出楢重が幼年期に手ほどきを受けた画家で、田結莊千里は金子雪操に画を習い、大塩平八郎や広瀬旭莊に教えを受けた経歴を持つ重要な南宋画家である。完瑛が紹介された「名譽画家序位不論」の下端には、大正昭和の船場で活躍した庭山耕園や浪華の町絵師を標榜した菅楯彦の父、盛南の名が確認できる。また、父芳園も弟子の菅其翠とともに大坂円山として「近世国画名譽」で紹介されているが、在世の完瑛の評価が高いことは当然であつたろう。

明治期に別格表記された三人(完瑛・祥益・千里)はもとより、今日における大阪勢の凋落ぶり如何ともしがたいが、同じ別格でも西京組の鈴木松年や幸野梅(楳)嶺、森寛齋、富岡鉄斎は、展覧会が開催される画家として今日でも忘れ去られてはいない。

美術書画骨董家として大阪高麗橋山中春篁堂、西京寺町熊谷鳩居堂、東京京橋岸田楽善堂などが、諸先生周旋所として大阪平野町藤谷修竹堂、同南本町沢田紅花堂などが紹介されている。古今書画の取り扱いは骨董商が、在世の作家にはそれぞれ最良の周旋所(作品の仲介斡旋)があつた。作家紹介に至便な本誌は美術愛好家のみならず、作品販売の手引書としての役割も果たしたものである。彼らは本誌発行の後援者(本誌部数購入者)でもあつたと考えられる。すなわち明治二八年の大阪の美術業界は、作家と周旋所、そして書画骨董商と美術図書取扱所が互いに連携しあつて成立する世界であり、西山完瑛は大阪で注目すべき円山派の画家として紹介されていたことを改めて認識しておきたい。

大正の状況

ここでは、大正五年(六年改正)と同八年(九年改正)に発行された『日本書画評価一覽』^(一五)から

西山芳園・完瑛を含む主要な画家を抽出して、兩年における評価額の変化(表一)を見ていきたい。

ちなみに大正八年の銀行員の初任給は四〇〜五〇円、そば一杯が八錢、化粧石鹼一つが一三錢(¹⁰⁰銭)であった。最高額である円山応挙の二〇〇〇円が如何に高額であるかが理解できよう。さて、双方を比較するとわずか数年で、ほとんどの作品評価に変化が生じている。これは第一次世界大戦の特需によるもので大阪を中心とした阪神間で急激に書画を収集する機運が生じてきたことに起因する。この時期、美術商により多くの売立て会が実施され、ますます一握りの画家に人気が集まってくるようになった。橋本雅邦や竹内栖鳳の伸び率は凄まじいが、池大雅や狩野探幽、渡辺華山や田能村竹田、与謝蕪村といった大御所もこの時期に一気に評価額をあげていくことがわかる。西山芳園・完瑛もまた三倍以上の上げ幅となった。現況からは考えられないことだが、大正八年段階で芳園とほぼ同じ評価を受けていた画家として、高久靄厓・長谷川等伯・岸駒・伊藤若冲・曾我蕭白・岡田半江がいる。又、完瑛とほぼ同じ評価を受けた画家としては木村巽齋・十時梅屋・原在中・森徹山・望月玉蟾・河鍋曉齋等が確認できる。今日に至り芳園完瑛だけが置き去りにされた感がある。しかし、大正八年における書画の動向について、我々は先入観を持たずに当時の評価に目を向けておく必要があるだろう。

昭和の状況

昭和九年、帝国審美協会から『日本古近現代書画家名鑑』古近篇・現代篇二冊(服部英雄・弘道閣)が発行された。本書は、「書画愛玩・鑑賞家の参考資料として緊要なる、書画幅に関する一切の諸事項概略を掲げた。特にいふべきは、該書家又は画家の書画の価格を略記した」とあり「現在最良最善の定本たらしむべく数年の努力を以て成された」とする。ここでは、古近篇を中心に検証するが、同書の構成は以下の通りとなっている。

まず、画家一覧が画家雅号の五十音順で紹介される。そして、書家一覧と画家及び書道家系図がそれに続く。その後、書画家の別号や大家の師匠、表装用語、書画鑑定の実際、近世千支一覧などが掲載される。画家紹介は、人名、別号、師匠、流派、得意(花鳥・山水など)、没年、享年、時代(皇紀)、価格(円)が記されており、シンプル且つ見やすい体裁となっている。ここで、芳園・完瑛の紹介を見ておこう。

西山芳園 景文 四条派 花鳥 慶應三年 六四 (一五〇)

西山完瑛 芳園 四条派 花鳥 明治三六年 四六 (六〇)

完瑛の没年・年齢に誤り(実際は明治三〇年で六三歳没)があるものの、それぞれの評価額は先述の大正八年より評価額が下がり、遡る大

正五年当時の評価に戻ったことがわかる。

ここで大正版に続き、昭和九年における評価基準を見るため芳園（二五〇）、完瑛（六〇）に近接（評価額）する画家たちをそれぞれ紹介してみよう。

芳園に近い評価の画家（二〇〇～一五〇）

仙厓、上田耕冲、長谷川雪旦、池田輝方、高島北海、村山半牧、江馬細香、中井藍江、森蘭齋、林園苑、鈴木百年、奥原晴湖（以上一〇〇）、上田公長、中山高陽、小田海遷、月岡芳年、河鍋曉齋、細田栄之、歌川国芳、岡田玉山（以上一二〇）、伊孚九、中西耕石、谷口謁山、安田老山（以上一三〇）、月岡雪鼎（二四〇）、海北友松、曾我二直庵、二世一蝶、駒井源琦、歙形惠齋、春木南湖、黒田稲臯、狩野探山、池田焦園、円山応瑞、僧愛石、木下逸雲、山田介堂、大岡雲峰、前田暢堂（以上一五〇）

完瑛に近い評価の画家（三〇～六〇）

森一鳳、吉村周山、木下盧州、白川芝山、鼎春嶽、中村芳中、大倉笠山、田能村小篁、草場船山、梶田半古、尾竹越堂（以上三〇）、橋本青江、原在泉（以上三五）、狩野永岳、島田元旦、十時梅谷、岡眠山、岡熊嶽、古市金蛾、八木奇峰、小林清親、浅井忠（以上四〇）、耳鳥齋、速水春曉齋、石田玉山、望月玉蟾、呉俊明、下河辺拾水、金子雪操、三島上龍、鶴澤探泉、三代豊国、土佐光孚、勾田台嶺（以上五〇）、宋紫山、慈雲、黒川亀玉、石川幽汀、鈴木芙蓉、長谷川雪堤、小泉壇山（以上六〇）

今日有名な画家を中心に、芳園・完瑛それぞれの評価に近接する四〇名の画家を抽出してみた。ちなみに昭和九年の銀行員の初任給が七〇円、そば一杯が一〇銭、大工手間賃（日当二円）であったことを記しておく。

芳園の周辺では、月岡芳年、河鍋曉齋、細田栄之、歌川国芳、歙形惠齋、月岡雪鼎など現在人気の浮世絵系画家が目立つ。また、海北友松や駒井源琦、伊孚九、森蘭齋、長谷川雪旦などをはじめ平成二二年に大阪歴史博物館で展覧会が開催された林園苑、禅画で知られる仙厓が同列で評価されていたことが興味深い。当時、特異なコレクターとして知られた山本發次郎の禅画蒐集はすでに始まっていたが、白隠、風外なども一五〇円に過ぎず、仙厓が一〇〇円、慈雲が六〇円の評価であった。人々の評価はまだ山本發次郎の目に及んでいなかったことの証でもある。

完瑛の周辺では、森一鳳をはじめ吉村周山、木下盧州、鼎春嶽、橋本青江、十時梅谷、岡眠山、岡熊嶽、金子雪操、速水春曉齋、石田玉山、下河辺拾水など注目すべき大阪画壇が目白押しだ。鈴木芙蓉や宋紫山、望月玉蟾、呉俊明、黒川亀玉、小林清親などは様々な企画で、今日も

展覧会に取り上げられている。地元大阪では、浪華琳派の中村芳中と戯画の耳鳥齋が最も評価を上げた画家と言えるだろう。

以上、明治大正昭和の名鑑をもとに芳園・完瑛の評価を振り返ってみた。まず、明治後期には完瑛が大阪円山派を代表する画家として認識されていたこと。大正期には芳園が長谷川等伯・岸駒・伊藤若冲・曾我蕭白等と同等の評価を得ていたこと。昭和戦前の完瑛は森一鳳、吉村周山、木下盧州、鼎春嶽、橋本青江、十時梅谷、岡眠山、岡熊嶽、金子雪操、速水春暁齋、石田玉山、下河辺拾水等とともに大阪画壇の画家として一定の評価を受けていたことが分かる。加えて、当時の銀行員の初任給を基準に考えれば、それらの作品が一〇万から五〇万の間で取引されていたという事実である。今日、長谷川等伯・岸駒・伊藤若冲・曾我蕭白等が芳園にどれほど評価額で差をつけているかは言うまでもないが、芳園や一鳳などの大阪の画家がごっそりと今日の評価を落としている事実を再検討しなければならない。

三、ビゲローコレクションに見る西山芳園の存在意義

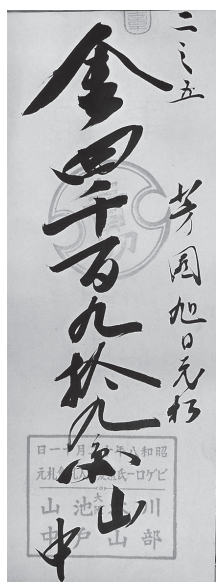
ここでは、昭和八年二月一日に東京美術倶楽部で行われたウィリアム・スタージス・ビゲローコレクションの入札(二八)を取り上げる。

ビゲロー(一八七〇―一九二六)は米国ボストン生まれの資産家でハーバード大学で文学士と医学博士の学位を所得、レイバースツール研究所にて研鑽後、ハーバード医学校にて外科学を講じた。明治一八年(二八八二)、日本の国情及び美術の研究のために来日し、東京駿河台紅梅町に邸宅を構えた。そして、予て滞在中のアーネスト・フェノロサとともに日本美術の研究に従事し、多くの古美術品の蒐集を開始している。その範囲は広く、刀剣を始め浮世絵、漆器、陶器、日本画の多岐に及んでいる。帰国後はボストン美術館の理事に就任し、コレクションの多くを同館に寄贈[明治四四年(一九一一)]したことで知られる。

ビゲローの没後、作品蒐集に尽力した大阪の骨董商山中定次郎(山中商会社長)に遺族からコレクションの処分に関する相談があり、東京で実施されたのが本入札である。明治期から海外へ日本及び東洋美術の紹介、輸出に携わってきた山中商会はロンドン、ニューヨーク、ボストンにも支店を有する世界有数の古美術商であった。本入札目録には、山中自身が旧友として、ビゲローの略歴も含めて挨拶文を寄せている。日本での開催(東京)は山中からの提案もであり、何よりも日本美術を母国に里帰りさせたい思いがあったのではないか。そして、博士遺愛の蒐集品の中から肉筆浮世絵と円山四条派に絞った入札会を企画したのであろう。



図四 「淡彩旭日老松」(個人蔵)



図五 「落札書」(個人蔵)

四、大阪における四条派の愛好者（完瑛鑑定留「鑑定録」と『西山芳園並完瑛展』をもとに）

平成二九年『なにわ風情を満喫ませう—大阪四条派の系譜—展（商業史博物館）の調査時に西山芳園・完瑛の墓所である善導寺（前述）を尋ねた。その折に住職のご母堂から完瑛のご子孫を紹介していただく僥倖を得た。現地での調査が重要なことを改めて認識したのだが、そ

入札件数三二〇点中、肉筆浮世絵が二〇〇点、四条派其他が一一〇点となっている。メインは肉筆浮世絵と言えなが、四条派其他の内訳を見ると、
 円山応挙四点、長沢芦雪二点、伊藤若冲一点、山口素絢一点、
 森狙仙一点、森徹山一点、松村景文四点、岡本豊彦二点、岡本秋暉三点、
 芳園・一鳳・清暉・来章四幅対一点、西山芳園二二点、横山清暉四点、
 森一鳳二四点、中島来章四点、塩川文麟三点、森寛齋一点、狩野芳崖二点、
 橋本雅邦三点、久保田桃水一点
 雪舟・探幽・周信・宗達・孤村・其一以上一点、常信・光琳・乾山以上二点、美人画等（めぐり含）一五点
 となっており、西山芳園が二二点（註一九）で最も多い。そこには、大阪の骨董商山中の想いも含まれていたかも知れないが、これだけの芳園作品が海を渡っていたという事実が重要だ。すでに大半のコレクションを寄贈した後の作品群とはいえ、芳園の「淡彩旭日老松」（図版四）が四一九九円（図版五）で落札⁽¹⁰⁾されていることに驚きを禁じ得ない。大阪画壇が一定の評価を得ていたことの証として認識されねばならないだろう。

のお陰で完瑛遺品の存在が確認できた。文具(硯や筆)をはじめ、完瑛印譜や書画鑑定の記録「鑑定録」など貴重な完瑛関係資料である。

ここでは、鑑定録をもとに明治期における書画の流通を探ってみたい。裏表紙に真気楼(完瑛別号) 鑑定図録(明治二十年十月至同二十二年九月とあるように二年間の控であることがわかる。鑑定数は一二五件となっており、一ヶ月にはほぼ五件の割合で鑑定したことが見て取れる。鑑定書を渡す場合と箱書きする場合があります、その鑑定も様々な言い回しがあつたようだ。実際の表記について、有名画家に対してのものと、父芳園や自らの作品に対しての記載の中から適宜抽出(後掲資料参照)してみた。

円山応挙をはじめ、呉春や蕪村、蘆雪などが散見できるが、先考・先人とは父芳園のことで、自らのものには完瑛画併書巻等と記している。円山四条派の作品が多いが、全二二五件中、その内訳(表記件数)は以下の通りである。

円山応挙(一一)・長沢芦雪(九)・山口素絢(三)・渡辺南岳(三)・駒井源騎(六)・中島来章(二)・呉春(一四)・松村景文(二四)・岡本豊彦(八)・柴田義董(四)・森徹山(二)・与謝蕪村(二)・尾形光琳(二)・酒井抱一(二)・岸駒(二)・英一蝶(二)・土佐光起(二)・森狙仙(二)・西山芳園(二八)・完瑛(三)

これら、芳園を筆頭に各作品に対する鑑定について、求められれば鑑定書としての「証」を発給している。ただ、それら文言を見ていくと、完瑛独自の評価基準が感じられる。それは、「無疑」、「真蹟無疑」、「真蹟不可無疑」、「精至善真謂傑作」といった評価や、「経眼」、「完瑛鑑賞」、「完瑛審諦」という最終表記に現れているように思う。

では、鑑定書や箱書きの依頼はどこから来るのだろうか。画題の下に記される依頼・持参・持来りとある人名が、その手掛りとなる。

まず、コレクターから見よう。芝川又右衛門(二代目)は実業家にして趣味人、完瑛には絵の手ほどきも受けた(『大阪人物辞典』)と言われている。上野理一は朝日新聞社長を務めた人物で、茶道に優れ、書画骨董にも興味があつた。嘉納治兵衛(七代目)は醸造家にして趣味人、山口吉郎兵衛は銀行家(山口銀行後の三和銀行)で知られるが、彼らはそれぞれ白鶴美術館、滴水美術館に収集品を収めていることと知られる。蒐集の過程で手に入った作品の鑑定書や箱書きを頼みに来たものであろう。また、先述の『日本美術書画名譽一覽全』にも記された骨董商として、山中春篁堂(高麗橋一丁目)、後藤祥雲堂(高麗橋三丁目)、藤谷修竹堂(平野町丁目)の名が確認できた。興味深いのは、老舗表具店井口古今堂(平野町)が頻出(一五件)していることだ。井口藤兵衛は明治大昭和を代表する表具師として知られ、その出入り先は住友吉左衛門、藤田伝三郎、鴻池家と大阪を代表する豪商に及んでいる。こうした一連の関連性の中で、芳園・完瑛の作品が大阪船場の豪商に収められたことは想像に難くない。

最後に、大阪市立美術館で開催された『西山芳園並完瑛展』の昭和一七年当時、芳園・完瑛の作品が如何なる人々に所蔵されていたのか、同展の出品リストから紹介してこの項を締めくくりたい。目録では、芳園・完瑛別個に記載されるが、ここでは所蔵者優先として両者合わせた点数で紹介する。

芝川又四郎（大阪市二点）、清海復四郎（大阪市一五点）、宮崎彌作（大阪市四点）、鳥井三次（堺市五点）、山口吉郎兵衛（菅屋市一〇点）、豊島久七（大阪市二点）、岡村平兵衛（堺市一点）、水落庄兵衛（大阪市六点）、住友吉左衛門（京都市一点）、泉吉次郎（大阪市五点）、小林一三（池田市三点）、岸本兼太郎（大阪市一点）、水野彌兵衛（大阪市一点）、草川求馬（菅屋市一点）、野村徳七（大阪市四点）、上田令吉（大阪市一点）、山口竹次郎（兵庫県七点）、楠井英一（堺市一点）、武藤舜應（大阪市一点）

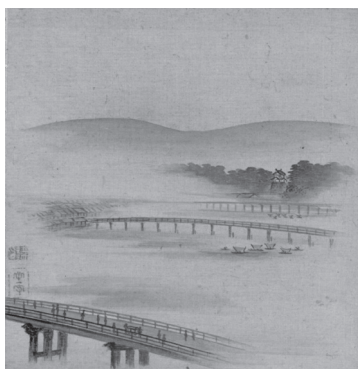
興味深いのは、浪華俳壇の先駆者、水落露石（庄兵衛）の名が見えることだ。露石は蕪村を中心に書画骨董も蒐集する趣味人として有名だが、完瑛に画を習った（『大阪人物辞典』）ことでも知られる。船場の老舗商家であった露石も含め、何れ劣らぬ財界人だが、阪急電鉄の小林一三や野村證券の野村徳七、山口吉郎兵衛、豊島久七（大阪三品取引所理事長）、住友吉左衛門など錚々たる顔ぶれが並び、その所蔵分布も大阪を中心に摂河泉に及んでいる。

五、大阪画壇（芳園・完瑛を中心に）の評価とその展望

写実性に富んだ美人画は完瑛の得意とするところ。立ち姿の『和美人』（図版六）は注文が多かったのか、同種の作品が巷間に散見される。大川の船遊びは芳園・完瑛ともに作品を残しているが、絹本着彩による細密描写の作品は完瑛に見るべきものが多い

芳園が得意とした渴筆による風合いは絹本よりも紙本に、その特徴が表れている。なかでも『黄稻群禽図』（図版七）はその効果が現れたもので、雨中の稻穂を群飛する雀を臨場感を持って描いたもの。大胆な雨線が飄逸な作品である。世上、芳園は紙本に優品ありと言われた。

写真が一般に普及しなかった当時、両者の真景図をはじめ、大坂風景画帖（図版八）は彼等の到達した絵画表現の典型と言えるものではなにかと思う。類型的な作品が多いことで、あまり評価の対象とはなっていないが、多くの画帖が確認できること自体、様々な注文があったことを証明するものである。蔵屋敷のあった旧幕時代には各藩の勤番侍が大坂時代の思い出に、明治以降は失われゆく大阪風情をしのぶよすが



図八「浪速三大橋」(個人蔵)



図七
「黄稻群禽図」(個人蔵)



図六
「和美人」(個人蔵)

として求められた作品といえよう。中に描かれた大川の船遊びや当時の生業を示す作品などは写生派ならではの絵画表現で、今となっては立派な歴史資料とも言えるものだ。

風合いによる上品の極致を追求した芳園と、写生力を生かしたアウトラインを上手く表現した完瑛。好みは分かれるものの、その構成力や枯淡の妙味は、やはり父、芳園に軍配を挙げたいと思うのだが如何であろう。

先述したが、今日に伝わった彼らの作品が押し並べて表具が上等であることは重要である。作品が大切にされたことの証だが、茶会や料亭の床の間を彩った作品として、そして何よりも船場の豪商に所蔵者が多かったことに起因するものであろう。日本画は本紙だけで見るものではない。我々は軸の備え(表具・軸箱)も含めて鑑賞することの大切さを忘れてはならない。展覧会図録は本紙だけを切抜きにして掲載されたものであり、それでは作品の全てを知ったことにはならないと思うのは私だけであろうか。

「大阪らしい上品な画家」と言われた芳園と完瑛。この「大阪らしい」とは奇を衒わない、自己主張が過ぎない、大作よりは小品を好むとする感覚と言ったらいだろうか。それは、つまり町屋の床の間に映える作品を指している。床の間の掛物(書画)とは、「室礼」の一部であり、立花や香、唐物等の工芸品との調和の中で味わうべきもので、それ自体が目立つのは「うるさい」ことなのだ。確かに、今日、展覧会で人気の極彩色の伊藤若冲や過度な陰影が怪しい曾我蕭白、そ

して美術館展示室で人目を引く岸駒の虎など巨大な作品が床の間に合うだろうか？枯淡の味わい深い文人書画や上品な四条派の作品こそが大阪の床の間を彩ってきたことを忘れてはならない。

戦前までの評価の高さは前述の通りだが、先入観を捨てて、大阪画壇の流れを見たとき、円山四条派に限っても西山親子はもとより、森徹山、上田耕夫、長山孔寅、佐藤魚大、松本観山、上田公長など顕彰すべき画家は数多い。「清和温潤」、「幽雅軽淡」を旨とした彼らの作品が長谷川等伯・岸駒・伊藤若冲・曾我蕭白等と同等の評価（大正九年）を得ていたことも忘れてはならないが、何故これらの評価が、地元大阪で下落してしまったのだろうか。決して、作品の質の問題ではない。では、茶会が減ったから、料亭での扱いが減ったから、パトロンとしての在阪財界人が興味をなくしたから、その何れもが一因と言えようが、根本的要因は、やはり地元大阪における顕彰の欠落によるものである。昭和一六年「岡田米山人並半江展」、昭和一七年「西山芳園並完瑛展」に連続して展示して以降、昭和五六年「近世の大阪画壇」までの四〇年間、大阪市立美術館が継続的な企画を打って来なかつた影響はやはり大きいと言わねばならない。この失われた四〇年間の蓄積の差こそが、京都（京都画壇）と大阪の差、すなわち大阪画壇の凋落に繋がっているのではないだろうか。

平成になって、大阪のヒンターランドとして豊かな文化的資源の集積地でもある堺市や池田市、枚方市、苜屋市などの公立ミュージアムでも大阪画壇の展覧会が実施されるようになってきた。戦災による影響とその後の都市化が進む大阪に比して、明治大正昭和の面影を残す文化都市としての試みとも言えよう。一方で、大阪歴史博物館で定期的に企画展が組まれるようになって来たのは心強いことと言える。

冒頭でも述べたとおり、明治大正期から地道に作品収集（主に浮世絵で、特に上方絵の研究では他の追隨を許さぬ勢いがある）を継続してきた大英博物館とロンドン大学の合同研究が活発化してきている。大英博物館にはまだ見ぬ芳園、完瑛の傑作があり、大阪四条派の意欲的な調査研究が進んでいる。大規模な里帰り展も計画中であるが、微力ながらこのプロジェクトに協力していきたいと望んでいる。その中で、一人一人の画家に物語を付与していくこと、そして彼らの作品があるべき姿で鑑賞されることに尽力していきたい。「幽雅軽淡」な作品を床の間の「室礼」の中で堪能する。こうした取り組みが実を結んだ時、大阪画壇（芳園・完瑛を中心とする四条派）の復権がなされるだけでなく、上品で「高等（こうと）」な大阪文化も再認識されていくからである。

付記 本稿をなすに当り、ご子孫の西山正実氏、西山一子氏を始めとして、池田治司氏、圓井謙三郎氏、圓井慎一郎氏、藪本公三氏、藪本太一氏から貴重な作品、資料のご協力ご協力を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

資料「鑒録定」抜粹、ただし（）は筆者

(有名画家)

濃彩箭竹図

西山謙鑒書画之印(朱文方印・斜半印)・西山謙印(白文方印) 完瑛鑑(朱文方印)

吳景文先生真蹟無疑 明治二十年十月 完瑛審諦

右 絹本豎物 従後藤氏鑒定頼来

白桃小禽図

菊花双鶴図

吳景文先生真蹟無疑 明治二十年十月 完瑛審諦

絹本豎二幅対 従上野氏鑒定頼来

郭子儀図

義董翁画真蹟無疑 明治二十年十月 完瑛観

山中氏頼

雪中平等院 扇面 完瑛鑑(斜半印・朱文方印)

先哲応孝翁真蹟無疑矣 明治二十年丁亥菊秋 完瑛観

従後藤氏持来

五鶴図 絹本豎幅 植邨氏持参

応孝翁画淡彩五鶴図真蹟不可最疑本物

明治二十年丁亥初冬 完瑛観

夏艸花三種 絹本双幅 木邨氏蔵幅

秋艸花四種

抱一上人画真蹟無疑 明治二十年丁亥暮秋 完瑛鑒賞

飛鴨水仙花図 絹本豎幅 同蔵

吳景文先生真蹟無疑 明治二十年丁亥秋冲 完瑛観

證

淡彩春草

墨画雲龍図 西山謙鑒定書画之印(朱文方印)

淡彩春草

右無落款

紋統本三幅対左右小幅

応孝先生真蹟無疑矣

明治廿一年戊子立春 完瑛審諦

西山謙印(白文方印)・西完瑛鑑賞章(朱文方印)

二月十五日認従西川氏囑来

青砥藤綱叡智使搜銭図 從中野氏持来

蘆雪翁書画真蹟無疑矣

明治廿一年戊子初春 完瑛鑒 完瑛鑑賞(朱文鑑賞)

竹林驟雨洗暑図

蕪村翁書画真蹟無疑矣

明治廿一年戊子春日 完瑛觀

墨画山水図

応孝先生真蹟無疑矣

明治廿一年戊子春日 完瑛鑒賞 西山謙鑒定書画之印(朱文方印)

墨画水仙図

画之印(朱文方印半斜印)

応孝先生真蹟無疑矣

右因需不記年月 完瑛觀

真景富嶽図

画之印(朱文方印半斜印)

応孝先生真蹟無疑矣

右同断 六月十七日午後三時認

餌刺天狗図 絹本直幅 同日鱗星氏取次

英一蝶傲戯画而真蹟無疑

戊子立秋 完瑛觀 印

設色春季花籠図

土佐光起所画当是真蹟無疑矣

明治戊子歲初秋 完瑛鑒賞

設色真画花籠図

左近將監光起真蹟不可最疑

明治戊子中秋 完瑛審諦

宝珠白鼠図

吳景文先生真蹟無疑矣

明治戊子初冬 完瑛觀

長春花双蝶図

蘆雪翁画真蹟無疑矣

明治己丑春日 完瑛觀

老松双鶴

證

藤谷氏頼

福祿壽

松旭舞鶴

落款安永丁酉初春写応挙

印章方面聯印各白文

右先生所画不可最疑矣

明治己丑歲仲夏

完瑛觀

絹本直幅

證

豐千禪師說法図

墨画金砂子紙本襖十二幀無疑矣

右呉月溪先生所画而墨法淋漓備

精至善真可謂傑作矣

明治廿二年己丑仲夏

完瑛審諦

西京中邨氏頼

(芳園・完瑛)

義家軍装図(朝臣)

絹本豎

木邨氏藏幅

淺間嶽真景図

絹本豎

同

萩花映水図

絹本豎幅

同

先人真蹟無疑

明治二十年丁亥菊秋 完瑛觀

墨画雨中嵐山 紙本豎幅 從森下氏持来 明治二十年十一月十一日認

先人遺墨無疑矣

有文左二書(上部に不明朱文方印半印)

裏時先人携来遊西京訪問人宮崎氏

同氏与兄弟同伴遊嵐山正□夏梅

雨瀟々節皆興尽歸其宿宮崎氏

其夜先人酒間乘興作此図即画間之

実況也来陪觀驚記今三十又餘年

受応囑記以得篤 宮崎氏は皇族有栖川家臣 通称曰頼母住家新榎木町

明治二十年丁亥歲立冬 完瑛西山謙併審諦

證

竹筍図

旭日稚松図

青梅図

絹本豎三幅対

落款芳園

印章方西朱白聯印

右先考所画真蹟無疑

恙箱表題字亦同筆矣

明治廿一年戊子五月

完瑛審諦

右植村氏持来五月廿八日認

梅花黄鳥図 絹本 竪幅 戊子七月十日赤井氏取次
水泉青楓図 完瑛画併書卷
薩田望嶽図 絹本 直幅 右同日認井口氏取次小野氏蔵
先考遺墨無疑矣
戊子立秋 完瑛観 印
義家朝臣図 絹本 直幅 同月同日高木氏頼
先考遺墨真蹟無疑矣
明治戊子立秋 完瑛観
孤鶴疑冬花図 絹本 直幅 近安頼
完瑛画併書卷
牡丹孔雀図 絹本 直幅 今田氏持来
先考遺墨真蹟無疑矣
戊子歳立秋 完瑛鑒賞
二王図 紙本 双幅 藤谷氏
先考所画真蹟無疑矣
明治戊子初秋 完瑛鑒併識

月夜嵐山図 絹本 竪幅 十月二日赤松清六之男利兵衛頼
先考遺墨真蹟無疑矣
明治二十一年戊子秋日 完瑛観
帰漁捕鱒図 絹本 竪幅 治邨氏持来
先考遺墨真蹟無疑矣
明治己丑春日 完瑛観
義家朝臣図 飛鳥井雅光公讚 絹本 直幅 五月七日尾野氏持来
先考所画無疑真蹟
明治己丑立夏 完瑛観
雨中夏景嵐山図 絹本 竪幅 治邨氏
先考遺墨無疑矣
己丑歳立夏 完瑛観
雨中青楓双小禽図 絹本 竪幅 磯上氏頼
先考遺墨無疑矣
己丑初夏 完瑛観

松苗破土図 紙本豎幅 井口氏持参
先考遺墨無疑矣
己丑歲盛夏 完瑛觀
許宣平與桃園 絹本豎幅 井口氏持参
僂人許宣平與桃子干婢図
先考遺墨無疑矣
明治廿二年六月 完瑛觀
酒河漁舟図 絹本直幅 井口氏持参
先考所画無疑
己丑歲盛夏 完瑛觀
雨中夏景嵐山図 絹本豎幅 井口氏
先考遺墨無疑矣
明丑夏日 完瑛觀
旭日波濤図 絹本豎幅 山中氏頼八月七日認
先考遺墨不可最疑矣
癸丑歲立秋 完瑛觀
墨画葡萄図 紙本直幅 植邨氏

先人遺墨無疑矣
癸丑立秋

完瑛觀

- 註一 平成二四年の『近世浪華の町人と文人趣味』以来、同二五年『花外楼―老舗料亭の一品』、同二六年『浪花慕情―菅楯彦とその世界』、同二七年『北野恒富と中河内―知られざる大阪画壇の発信源―』、同二九年『なにわ風情を満喫しませう―大阪四条派の系譜―』に至る五カ年計画で大阪画壇を順次取り上げてきた。
- 註二 『なにわ風情を満喫しませう―大阪四条派の系譜―』平成二九年大阪商業大学商業史博物館
- 註三 『西山芳園並完瑛展』記念図録 大阪市立美術館 昭和一七年
- 註四 『雑録 西山芳園先生』『名家談叢第十七号』明治三〇年
- 註五 享和三年（一八〇三）という説もある。
- 註六 一分金（一兩〃四分）一兩十万と考えた場合、二万五〇〇〇円となる。
- 註七 森一鳳「寛政一〇（一七九八）〜明治四（一八七一）」
- 註八 菅其翠「天保二（一八三一）〜明治二〇（一八八七）」
- 註九 「西山芳園」「大阪人物誌」正統 石田誠太郎 臨川書店 昭和四九年
- 註一〇 「後藤松陰」「大阪人物誌」正統 石田誠太郎 臨川書店 昭和四九年
- 註一一 木村武夫「浪華書学校の顛末」（魚澄惣五郎編『大阪文化史研究』星野書店 昭和十八年）
- 註一二 展覧会調査の過程で西山完瑛のご遺族と連絡を取ることができた。そこで、お手元に伝承された印鑑、各種資料を実見する機会を得た。本項では、「西山完瑛資料」としてその中から関連するものを紹介したい。
- 註一三 武部白鳳の遺族から大阪市新美術館建設準備室に寄贈された資料のなかに、完瑛による「白鳳号命名書」や「完瑛先生二五年追悼会」等が存在することを、同室の小川知子氏よりご教示いただいた。
- 註一四 「復刻版大阪営業案内大阪商品仕入便覧」明治三二年版を昭和五〇年に復刻（新和出版社）。同書によれば書籍商が多く軒を連ねる心斎橋筋にあって図書販売諸物品取次用達として本町四丁目にて確認することができる。
- 註一五 大阪市西区本町四丁目四番地 編集発行者 石塚猪男（瀬木慎一）『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成 書画の価格変遷二〇〇年』里文出版 平成一二年）から
- 註一六 今日相場として考える場合、銀行員の初任給が二〇万前後であることから約三〇〇〇倍で考えられるのではないか。大正期の引用は「値段の明治大正昭和風俗史上下」朝日文庫 昭和六二年から。
- 註一七 山本發次郎（明治二〇年一八八七〜昭和二六年一九五一）岡山生。船場でメリヤス業を営む山本發次郎の婿養子となり二代目を襲名。山發産業を経営しメリ

ヤス製品をはじめ染毛料を製造販売する。事業のかたわら美術品蒐集をおこない関西を代表するコレクターとして知られる。

註一八 『故ビゲロー氏遺愛品浮世絵及四條派画幅入札目録』 昭和八年 大阪商業大学商業史博物館蔵(入札期日昭和八年二月九日・一〇日両日下見、一日入札並開札 場所東京市芝区新橋七丁目東京美術倶楽部 札元東京川部商会・本山豊實 大阪池戸宗三郎・山中吉郎兵衛)

註一九 芳園作品二点は以下の通りである。一、中蓬萊山・左鶴鶴・右鴛鴦 絹本 横幅 二、淡彩柳鷺 絹本 縦幅 三、枝垂櫻雉子 絹本 縦幅 四、淡彩水辺田家 絹本 縦幅 五、淡彩旭日老松 絹本 縦幅 六、淡彩雨中杜鵑 絹本 縦幅 七、着色菊雉子 絹本 双幅 八、松蔦鷹 絹本 縦幅 九、椿小禽 絹本 縦幅 一〇、茶之木小禽 絹本 縦幅 一一、淡彩通天 絹本 縦幅 一二、淡彩花鳥 絹本 横幅 一三、淡彩白蓮蛙 未記載 縦幅 一四、富嶽 絹本 縦幅 一五、着色旭日青稲 絹本 横幅 一六、淡彩飛雀 未記載 縦幅 一七、淡彩恵比寿 未記載 縦幅 一八、着色武將 絹本 縦幅 一九、着色籠 未記載 縦幅 二〇、春景山水絹本 小品幅 二一、着色秋草雀 二枚折

註二〇 『なにわ風情を満喫しませう―大阪四条派の系譜―』に出品していたいただいた折に軸箱に落とし札があり、山中商会により四一九九円で落札されたことが判明した。入札が行われた昭和八年、銀行員初任給七〇円、大工の手間賃二円、そば一杯十銭であった。『値段の明治大正昭和風俗史上下』朝日文庫 昭和六二年から。

註二一 書画商などから依頼される作品の鑑定書を書留めた帳面のこと。鑑定録甲集(明治二〇～二二年迄)と表題される縦帳で、完瑛自筆による鑑(鑑)定控である。同書とともに監書録乙集(明治二二～二三年迄)、経眼監書録丙集(明治二四～二五年迄)、監書録戊集(明治二七～二八年迄)の四冊が確認できる。全冊数は判明せぬが、丁集が一冊抜けているようだ。貴重な資料と言えるが、大部の丁数でもあり、ここでは「鑑定録甲集」のなかから四〇件の紹介に留めることとしたい。また機会を改めて、全文翻刻に臨みたいと考えている。

参考文献

- 『大坂画壇はなぜ忘れられたのか―岡倉天心から東アジア美術史の構想―』中谷伸生 醍醐書房 平成二二年
- 『大阪人物辞典』三善貞司 清文堂 平成二二年
- 『大坂の書と画と本―関西大学図書館所蔵―』関西大学図書館 平成九年
- 『大阪文化史研究』星野書店 昭和一八年
- 『おおよさか文藝書画展―近世から近代へ―』関西大学図書館創設八〇周年記念・文学部創設七〇周年記念 関西大学図書館編集発行 平成八年
- 『完瑛画譜』芸艸堂 明治一九年
- 『近世の大阪画人―山水・風景・名所―』堺市博物館 平成四年

- 『近世の大坂画壇』 大阪市立美術館 昭和五六年
『新修大阪市史第三卷』 大阪市 平成元年
『浪華摘英』 浪華摘英編纂事務所編 大正四年